

最新成果から見た聚楽第跡の姿

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

聚楽第とは 豊臣秀吉が天正 14 年(1586) 2 月に築城を開始し、天正 15 年 9 月 13 日に母の大政所、正室の北政所とともに大坂城から移り住んだ洛中における居城です。イエズス会宣教師のルイス・フロイスによると、「じゅらく聚楽」とは、「あらゆる喜びと楽しみが集まる場所」を意味しています。天正 16 年には後陽成天皇の行幸が行なわれ、天正 19 年には甥で関白の豊臣秀次に譲られています。しかし、文禄 4 年(1595)に秀次が失脚し、高野山で切腹させられると、聚楽第は秀吉自身の手により破却されてしまいます。築城から

破城までわずか 9 年という短期間の居城でした。

これまでの聚楽第研究 1991 年に京都府埋蔵文化財調査研究センターが本丸東堀を発見して以降、発掘調査成果等を用いた実証的な研究が進展します。次いで古川匠氏らが 2016 年に発表した、地表に人工的に振動を与えて土質の変化を読み取る「表面波探査」を用いた復元方法により、内郭を構成する本丸、南二之丸、西之丸、北之丸の四つの郭を囲む堀の詳細な形状が復元されました。この研究では複雑な形状をした外堀の復元案も提示されています(図 1)。

最新の調査成果 2023 年の 9 月～12 月にかけて図 1 で復元された聚楽第の西外堀推定地で発掘調査を行ないました。この調査では、幅約 11m、深さ約 3m の南北方向の堀状遺構が見つかりました(写真 1)。この遺構以外では、壁土などの原材料となる「聚楽土」の採取痕跡である土取穴が多数見つかっています。土取穴が垂直に近い掘形であるのに対し、堀状遺構は緩やかに上方に向かって広がる断面形状です(写真 2)。しかもこの堀状遺構でのみ金箔瓦が出土しています(写真 3)。聚楽第本丸の堀が石垣を有し、幅約 43m、



写真 1 2023 年調査全景（北東から）



写真 2 2023 年調査堀状遺構の断面（北から）



写真 3 堀状遺構出土の金箔方形飾瓦（巴文）

深さ5～8mであることと比較すると、この堀状遺構は異なる姿をしており、外郭や武家屋敷を限る区画溝かもしれません。

新たな復元へ 今回の調査を含めた124次に及ぶ聚楽第関連の調査結果から、西外堀推定範囲の10箇所以上で図1の規模の堀が存在しないことが明らかとなっています。このことから、外堀の描かれていない広島市立中央図書館所蔵の『諸国古城之図「山城聚楽」』を参考に、秀吉が天正19年に実施した京中屋敷替え以前の聚楽第を復元しました(図2)。なお、北之丸は秀次時代に増築されたと考えています。この復元図では、今回見つかった堀状遺構と1999年調査で検出した堀状遺構を結んだラインは、がもうひだのかみ うじさと 蒲生飛騨守(蒲生氏郷)の屋敷推定地の西端付近を通ります。今回の調査では蒲生氏郷の家紋である「巴文」の金箔瓦が出土しました(写真3)。

さらに、これまでの調査成果から、聚楽第本丸は一条大路と大宮大路の交点を基準に占地された可能性が高いこともわかりました。西は壬生大路を延長した平安宮内道路、南は鷹司小路を延長した宮内道路になり、南北3町、東西2町の範囲に収まります。他の郭や堀等も平安宮内の道路を参考に割りつけられたとすると、今回の堀状遺構も朝堂院と中務省・太政官・民部省間の東側を結ぶ宮内道路の延長上に相当しています。

(京都市文化財保護課 馬瀬智光)

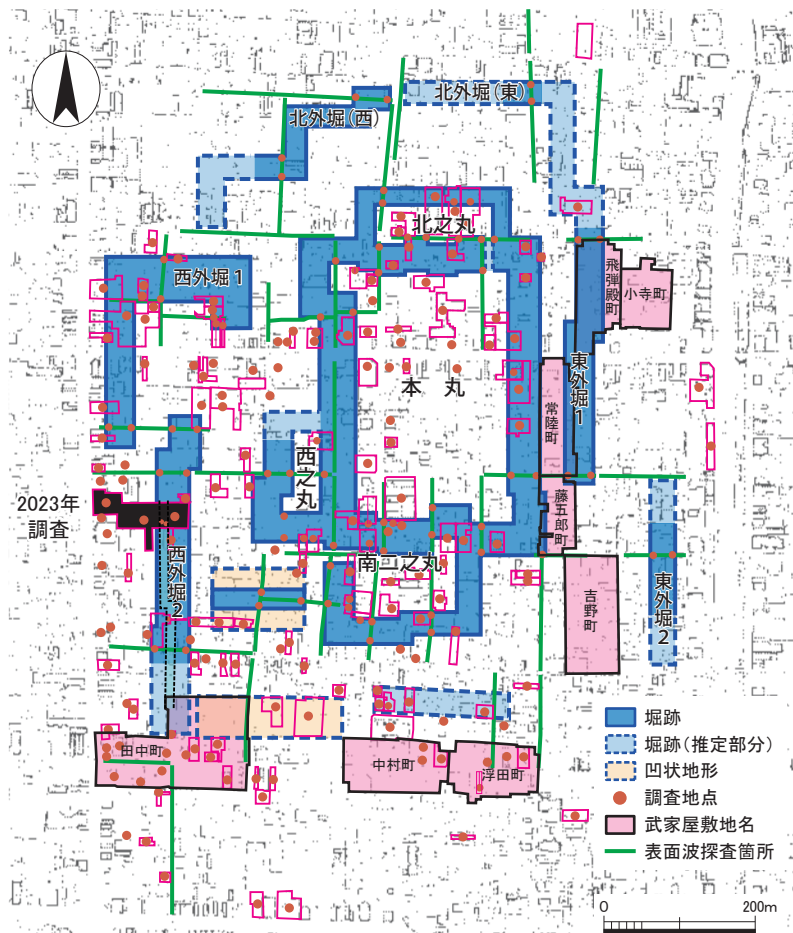


図1 これまでの聚楽第復元図(ただし、外堀の有無は不明)

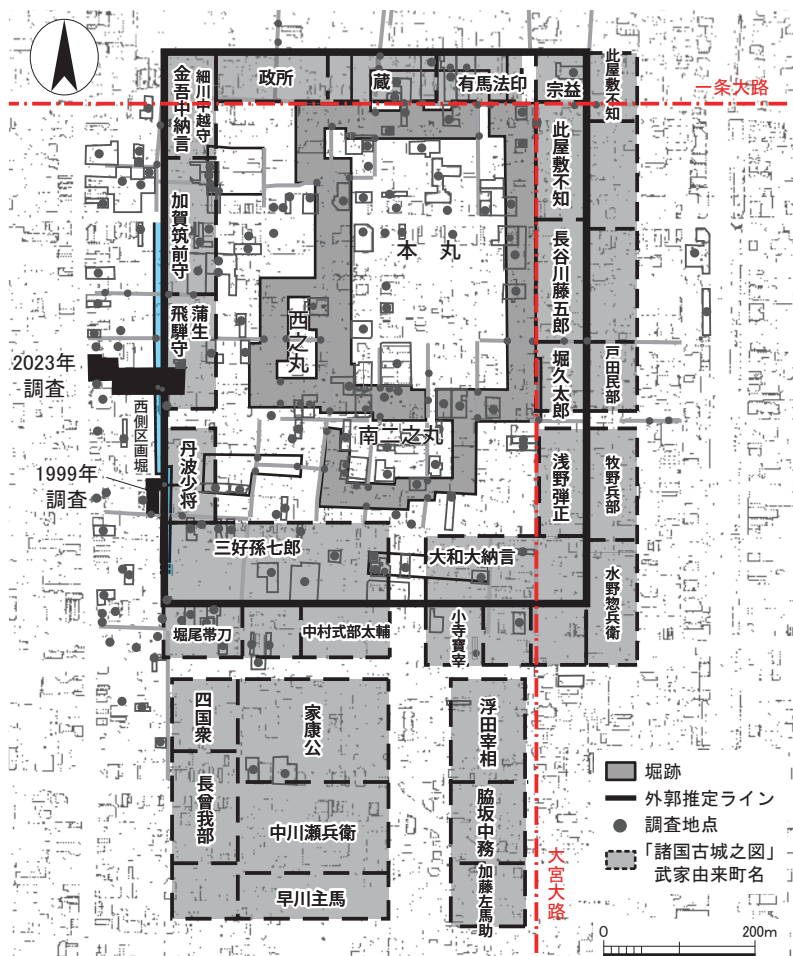


図2 新たな聚楽第復元図(京中屋敷替え以前)